

心に咲く空

華月 紘

あなたへの道

あなたはあつという間

永遠ならいいとあれ程思ったのに

永遠など存在しないのなら

もっと冷めた目で世の中を見れたらいいのに

いつも私は忘れて

変わらない愛を求めてしまうんだ

私はあなたの喜ぶ顔をいくつ見れたらろう

あなたへの愛があなたを壊してしまいそうになる

あなたの家は駅から遠くて

まるでデートの度にお散歩みたいだったね

方向音痴の私は何度行っても覚えられなくて

でもね、もう行くことのないだろう今になって

やっとあなたの家への道覚えたんだよ

猫

貴方に拾われてから

僕はひとりでは生きれなくなってしまったのです

野良猫だった時には

なにも感じずひとりで生きていたのに

貴方に拾われてから

僕は弱くなってしまったのです

寂しさを感じるようになってしまったのです

ねえどうか愛しき貴方

餌をください

水をください

撫でてください

僕を愛してください

ペディキュア

時間が止まったみたいだった

あなたを忘れるまで

苦しい程に私の心を支配したあなた

でも不思議

それはほんの一時

もう思い出してもなにも感じない

あなたには余韻がない

あなたといっても私にいいことなにもないから

離れてみてそれがよくわかったから

だから思い出で苦しんだり

あなたを懐かしがったりしない

あなたは私の最後の嘘で苦しんでいますか

でも後悔はしていない

私の最後の幼い恋だった

あなたが塗ってくれた

ペディキュアだけがまだ赤く残っている

出逢いの意味

今ならあなたの気持ちがわかるのに

もう届くことない今なら

でもあのまま一緒にいても

幸せになれなかつただろうこともわかる

なのに私達は出逢った

慰め合う為だけだったのかな

傷つけ合っただけなのかな

例え私達の出逢いに悲しい意味しなくても

あの一瞬私を光にしてくれてありがとう

光の差す部屋

光の差す部屋

この凍える季節でも暖かい

うたた寝から一人目覚めても

孤独を感じないでいられる

あなたの為に

らしくないことをしている

こんな私が

早起きして朝ご飯を作るなんて

自分を保っていられるの

ここからまた始まるの

時がなにかを変わらせたとしても

あなたと私は変わらないようにと祈る

そして今夜もあなたの帰りを待つ

愛しい人

君が子供のように泣く

こわいよ こわいよ

君が肩を震わせて泣く

こわいよ こわいよ

傷つきやすく脆い君には

社会はあまりに厳しくて

それでもがんばっている君の

背中を撫でて抱きしめることしか

私にはできない

私はいつでも傍にいるから

私は君のものだよ

だから泣かないで愛しい人

夢のような人

実らなかったから

私の心はずっとあなたのもの

綺麗な思い出として消えなくて

きつとこれから何度も

こうしてあなたを思い出す

二度と会えないから

だからよけいに消えない

思い出す数は減っていても

消えてはくれない

それはあなたがきつと

夢のような人だから

祈ることでこうして思い出す

もう一度あなたに会いたい

青空

前向きな歌を歌おうともがく

白いカーテン揺れる先には真っ青な空

それが私を迷わせる

私の周りにはきっと

いろんな物が山積みになっていて

私はそれらから目をそらしているんだ

今感じる小さな幸せは

それらから目をそらした上に成り立っている

でもひとつひとつ

目の前のことを片づけていけば

いつの間にか私は

雲ひとつない青空の下に立てるかもしれない

ひとつひとつ流れに身をまかせて

そうしたらきっといつか...

道

転んだっていいじゃないか

諦めなければ自然と手が支えてくれる

立ち上がりたくなったら自然と力が入るだろう

間違ったっていいじゃないか

長いか短いかわからない人生

間違い探しは人の常

でも間違い探しばかりしていたらつまらない

一歩でも前に進んで行こう

でも一つ思うことは

間違いとわかっている道には進むな

きっとそこには予想通りの答えしかない

白い鳥

落ちてきた雪が白い鳥に見えた

私は白い鳥になった

そして遠い貴方の元へ飛んで行くの

雪降る中凍えそうな羽を羽ばたかせて

白い鳥になった私だから

貴方は私を見ても私と気づかない

でもいいのその方がいい

私は久しぶりに見る貴方の顔を

ジッと見つめて元気かどうか確かめる

本当はちゃんと眠って休んでいるかも確かめたいけれど

貴方がこの白い鳥にふと目を向けた

私は久しぶりというように羽を広げてみせる

本当は話したいけど触れたいけど

でもいいのその方がいい

貴方は白い鳥から目を離して

視線を元に戻した仕事始めた

無理しないでね

昔みたいに貴方にそう言えたなら

でもいいのその方がいい

貴方が大丈夫そうなを見届けて

白い鳥は雪の中溶けていくの

赤い華

赤い華を見たくて

私は何度もそこを開こうとする

赤い華いっぱい包まれて

壊れて消えてしまえたなら

もう苦しませる過去からも

不安にさせる未来からも

解放されたい

でもなかなかそこは開いてくれなくて

赤い華は少しずつしか姿を現してくれなくて

自分の未熟さを痛感する

赤い華溢れて

たくさんこぼれ落ちて

私もそこへ逝かせて

君の笑顔

あなたに会えた時間は

一生にしたら何分の一かな

きっと一瞬のこと

あの日あなたに会いに行けなかった

あなたは理解してるつもりでも

私へのプレゼント鞆に抱えて

悲しい思いをしたよね

一瞬だったんだから

無理してでもなんとかあの日会いに行けば

そうしたらあなたの思い出の中

私はほんの少し綺麗になれたかもしれない

時々あなたと夢で会うの

その度懐かしいあなたの笑顔に

私は泣いちゃうの

あなたはどうしたのと

不思議そうな顔をする

毎回そんな夢で

会えて泣いちゃうのは

現実ではもう二度とその笑顔に

会えないと知っているから

だってきっと町ですれ違っても

互いに気づかず互いの今を歩いて離れていく

明日の約束

君はあまりに脆いから

いつ壊れてしまうかと

私は戸惑いながら君の肩に手を置いた

君は不安になると

私に冷たい目を見せる

その度私は怯えてしまう

それを隠すように私は笑ってみせる

君が不安になるようなことは

なんにもないよと伝えたくて

だから君機嫌を直して

昨日みたいに冗談言って笑って

未来の約束は保証のないものだとしても

私達は大丈夫だから

明日も一緒だと約束し続けるよ

私がこわいものから君を守るから

だから君はもう壊れたりはしないんだよ

君の笑顔が私に力をくれるから

私に笑顔をくれるから

別れ道

夜空が私を冷たく包んで

鳥籠の鳥はそんな空へ飛んでいってしまった

今まであった温もりは

今はもうどこにもない

そこはまるでポツカリと穴が開いてしまったようだ

知らず知らずあった安心という土台

急に消えてしまったら上手く立てない

元に戻るだけだとしても

思い出を抱えて前と同じ形に戻れるものではない

気がつけば頬を冷たい涙がつたっていた

今が夜でよかったと私は思う

この闇が私の涙を隠してくれる

急に戻りたい衝動にかられ立ち止まる

許しというものはもう得られるはずがない

これは神様が私に与えた罰

罪人は振り返ることを許されない

いつしか憎しみは愛という情に負けるだろう

そうしたら今度は良き思い出が私を苦しめるんだ

そんな未来へとまた私は歩き始めた

貴方との永遠の別れのそんな帰り道

心に咲く花

強い風にあおられて

今にも倒れてしまいそうな花

倒れまいと懸命に咲く花

地面に強い根をはって

簡単には負けはしないと花は言う

雨まで降ってきた

花びらの上をつたうその雫は

美しくもある

まるで花が泣いているようだ

この小さな一つの花に

私は自然の強さを感じる

今まで泣いていた私は

その花に励まされた

辛いことは本当にうんざりする程あるけれど

私にもきっと根がはっているはずだから

涙を雨の雫に変えて

こんなことに負けはしないと

私は呟き歩き出した

気がつけば太陽が現れ風も穏やかになった

花は輝きに満ちて綺麗に咲いていた

木漏れ日の夢

儂げな木漏れ日が私の顔を照らす

青々とした芝生の上

私はかつての夢に思いをはせる

幼かったあの頃

明るい未来だけを夢に見ていた

あれから何度も転んで

涙という血を流し

いつの間にかあんな夢を見なくなった私

儂げな木漏れ日の中

今度は違う夢を見ようと

青々とした芝生の上

寝転び私は空に笑ってみせる

貴方との桜

ここからは空は上手く見えなくて

夜はネオンで空を見ることさえ忘れてしまう

でもこの街にも桜が綺麗に咲くことを

私は知っている

貴方と手を繋ぎ一緒に見た桜

あの日は輝く程に晴天で

桜の木の下私達は笑ってお弁当を食べた

時は切なくも物事を美化させるから

あの日貴方と見た桜は

今の私の中よりいっそう綺麗で

写真を見るとその中には

貴方にもう会えなくなる今を知らない

笑顔の私がいる

眠り姫

こんなにも気持ちの良い晴れの日

カーテンを開けることもせず

君は眠る

先週の洗濯物は

ベランダにまだ干されたままだ

君は何を夢見て眠るのか

例えそれが叶わぬものだとしても

君はそれを求め眠るのだろう

そして君は現実に怯えるあまり

一日中眠り続けるのだろう

やせ細った顔を

カーテンの隙間から差す光が照らす

自分を愛せない君よ

せめて夢の中では穏やかに

瞼を閉じれば

幼かった頃の君の

元気な笑顔がそこにある

心に咲く空

<http://p.booklog.jp/book/89507>

著者：華月 紘

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hiroko3/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89507>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89507>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ